

## 『文明崩壊』(上・下)

ジャレド・ダイヤモンド 著 楡井浩一 訳 草思社  
上・下巻 各2,100円(税込)

### スリリングな「謎解き本」で 環境問題を再考

会員 大水 英智 (60期)



イースター島という島をご存知の方は多いだろう。おそらく、この名前を聞いてほとんどの方が思い浮かべるのは、どことなくユーモラスな顔をしたモアイ像ではないだろうか。

島にはこの像が1000体近く残されており、最大のものは何と約20m超(5階建てのビルよりも高い!)にも及ぶそうだ。

ところで、イースター島は人の現住する他島から約2000km以上も離れた南太平洋上にあり、地図で見るとまさに絶海の孤島である。しかも、1722年に島を訪れた西欧の探検家によれば、島には樹木も家畜もほとんど存在せず、不毛の地のようなだったという。

モアイ像を建造した文明は、そのような不毛の孤島で、一体どのように経済機構を構築し巨大な像を設置する住民を養ったのか。また何より、この文明はなぜ、そしてどこに消えてしまったのか…。

「文明崩壊」という刺激的なタイトルの本書は、上記イースター島文明のほか、マヤ文明、北米アナサジのアメリカ先住民文明など驚嘆すべき遺跡の数々を残した文明が隆盛を極めた後に謎の崩壊を遂げたことに着目し、その謎を解明している。

この謎解きのキーワードの一つが「環境侵害」。

進化生物学者、生物地理学者である著者は、近隣地域を含めた数百年単位の環境を科学的に調査し、

人類自身の何百年にも渡る環境侵害が文明崩壊に大きな影響を与えたのだと解き明かす。

そのダイナミックな謎解きはミステリー小説にも匹敵し、読み応え十分である。

さらに、著者の視点は過去の文明に止まらない。

本書の後半で克明に記されているのは、環境汚染が問題となっている現代の中国やオーストラリア、そして環境の悪化が国の崩壊にまで結びつきつつあったルワンダ、ハイチなどの事例であり、著者は環境侵害と文明崩壊というキーワードが現代にも敷衍されるものだと警鐘を鳴らしている。

本書を読み進めていくと、過去の文明崩壊が決して他人事ではなく、むしろ既に身近な問題になっているというショッキングな事実がひしひしと胸に迫ってくるのが感じられる。

しかし、本書は単なる悲観論の書物ではない。

本書のメッセージは「過去から学び未来に繋げよう」というものだ。

同時に著者は、環境という大きな問題に対し、一人でもなし得ることがあると主張する。これが読者にとっての救いであり、前を向く力を与えてくれる。

本書は「謎解き本」としてスリリングであることに加え、環境問題について再考する端緒となるという意味で、「一粒で二度美味しい」一冊であった。